

常任理事 会担当者	委員会名	(兼任指定職)	令和4/5年度 課題と抱負 (50-200文字程度を目安にご記入ください)
		委員長	
小田	理事会	小田 義直 (理事長/九大)	リサーチマインドを持った病理医の育成と学術活動の活性化、2. ゲノム医療に対応した病理医の育成、3. 国際感覚豊かな病理医の育成、4. 病理医の働く環境改善および病理専門医数の増大、5. 情報発信の強化、という目標達成のために、学会運営内容の充実化、各種学術活動の活性化、医療業務および教育活動の支援を積極的に行う。各種委員会活動の活性化のために若手委員を多く抜擢し委員会活動の持続性を担保するとともに、その効率化のための統合や改変も検討する。
豊國	倫理委員会	古川 徹	・日本病理学会総会演題登録時の倫理審査確認について確定する。 ・「病理専門医の行動規範」について必要であればpublic commentを受けて策定する。 ・病理学会会員、外部組織からの病理関連倫理事項の問い合わせに適宜対応する。
	COI委員会	中村 直哉	理事、各種委員会委員長等のCOI審査をすみやかに、管理を適切に行う。 日本医学会COIガイドラインが改訂される場合は、対応する。
	個人情報及び匿名加工情報取扱い委員会	谷田部 恭	研究委員会の下で行なわれる研究事業等における個人情報及び匿名加工情報・非識別加工情報等の取扱いが適正に実施されるよう、監督、管理を行う。
	学術評議員資格審査委員会	伊藤 智雄	委員の連携により、学術評議員内規に基づいた公正で適切な審査を進めてゆく。合わせて、問題点などがあれば適宜改善に努めてゆく。
	功労会員・名誉会員資格審査委員会	落合 淳志	
大橋	企画委員会	大橋 健一 (常任)	学会の発展に資する総務的な種々の事項を立案・検討する。学会の将来構想、機構改革、その他の委員会に属さない重要事項につき検討する。理事会、委員会活動の活性化のため、若手の登用等の対策を進める。
	男女共同参画・働き方改革委員会	村田 哲也	共通講習BIに「両立支援」が含まれていることから、本委員会でも両立支援に関する講演を行います。まずは2023年春の総会(下関)で行うこととし、演者と内容を詰めていきます。
	病理診断・臨床検査あり方検討WG	増田しのぶ	“病理診断”と“病理学的検査”の区分を病理医自身が明確に認識するため、また、病理医が“病理診断”を適正に行うための課題を抽出し解決の方向性を見出すために、現状把握と情報共有を行う。登録衛生検査所における“病理学的検査”、タスクシフトと病理解剖、ゲノム医療における病理医の業務負担、病理検査室の管理運営者としての病理医の役割、諸外国における病理医の位置づけなどについて、複合的な視点から議論を進めてきた。引き続き現状に対する理解を深め、認識を共有する。
	登録衛生検査所等における「病理診断」に関する検討委員会	大橋 健一	登録衛生検査所等における病理診断に関わる諸問題を整理し、対策を検討する。保険医療機関間の連携病理診断を広げるための方策を検討する。
	支部委員会	池田 栄二	日本病理学会員からみた最も身近な存在である支部として、診断業務および学術の交流の場を提供する体制を維持発展させる。また、次世代を担う若手病理医・病理学者の育成に尽力するとともに、学部学生と研修医に対しても医療における病理業務の重要性を含めた情報を発信する。これら支部活動の活性化に向け、支部委員会にて7支部間で密な情報交換を行う。
	北海道支部	鳥越 俊彦	第2期目になります。これまでに実施したWEB併用形式を活用して、標本交際会やセミナーを企画・開催する計画です。また6月には合宿・対面形式で、病理夏の学校を開催する予定です。ポストコロナ時代のNew Normalを定着させ、支部会の発展と若手病理医の育成に尽力したいと思います。
	東北支部	古川 徹	東北支部における課題とそれに対する取り組みとして以下をあげる。1)病理医を増やす取り組み: 病理学を魅力ある研究、診療分野として学生や研修医、臨床医により一層認識させるため、支部集会以外の学部学生、研修医による発表機会の増加、奨励賞等のインセンティブ確保、初学者にアピールする病理診断・研究セミナーの開催、COVIDに対応した夏の学校の取り組みをアレンジする。2)研究アクティビティを上げる取り組み: 研究の価値をわかりやすく提示することが重要であり、日常の病理診断業務が研究に展開すること、研究成果を積極的に発表することが国内及び国際的に認知されることにつながり、エキスパートとして国内年4回の支部学術集会、年1回のサマーセミナーを開催する。現在、webのみの開催を行っているが、現地開催が可能になれば、現地のみ、もしくは現地+webの開催を検討する。
	関東支部	中村 直哉	今年度も支部学術集会はweb開催になりそうですが、コロナ禍が落ち着いてきたら対面開催に戻したいと考えています。Web開催によって支部事務局の業務削減がされたので、これは継続して行きます。
	近畿支部	羽賀 博典	近畿支部では昨年度に引き続き、年4回の学術集会と夏の学校をオンラインで開催する予定です。支部長の交代により事務局も移転しましたので、当初は学術集会の運営に不慣れな点も多々あるかと思いますが、支部会員や他支部との情報交換もふまえて、充実した支部会にしていきたいと思っています。
	中国・四国支部	池田 栄二	COVID-19の感染拡大状況に応じた開催形式にて、支部学術集会や病理学夏の学校などの支部活動を継続して行う。また、支部に導入されたWeb会議システムを活用し、新たな集会の立ち上げなど支部活動のさらなる活性化をはかる。学術面においても、病理学的新知見を発見するための体制の整備も試みる。
	九州・沖縄支部	久岡 正典	引き続きコロナ禍にあっても、支部の活動を停滞させることなく運営していきたい。なお、2年間休止していた病理学校をWEB開催するべく計画し、若手病理医のリクルート活動を再開する予定である。
	財務委員会	大橋 健一 (常任/企画)	引き続き学会の財務基盤の安定性が維持されるように努める。財務の視点から、学会の発展のための課題、将来構想を検討し、適切な支出をする。
	都築	国際交流委員会	都築 豊徳
田中	学術委員会	田中 伸哉	宿題報告(日本病理学賞)、病理診断特別講演(病理診断学賞)、A演説(学術研究賞)、B演説(症例研究賞)、学術奨励賞について、賞のあり方を再確認しながら、円滑に進めていきたい。
都築	編集委員会	都築 豊徳	学会刊行物の編集・発信の安定した運営に努める。また、これらの一層の充実に向けた課題・改善策を検討する。特に、海外への発信力を高める工夫をする。
田中	PI刊行委員会	田中 伸哉	IFの向上はもとより、病理学会会員が論文を投稿・掲載することがステータスと実感できるような英文学術機関誌にしていきたい。
	PI常任刊行委員会	田中 伸哉	従来円滑な査読が行われているが、委員の先生から、PI誌のステータスがより一層向上するような方策を募り実施していきたい。

常任理事 会担当者	委員会名	(兼任指定職)	令和4/5年度 課題と抱負 (50-200文字程度を目安にご記入ください)
		委員長	
都築	「診断病理」編集委員会	牛久 哲男	病理専門医・専攻医にとってより魅力あるジャーナルを目指し、読者が知りたい内容に関する総説執筆依頼、充実した査読体制の維持を継続する。投稿数増加、電子ジャーナル化やDOI付与等について継続課題として検討を進める。
	病理専門医部会会報編集委員会	池田純一郎	『診断病理』の発刊に合わせて年4回の会報を発行する。専門医制度に関わる最新情報を専門医の皆様へ周知するとともに、各号の特集記事、各支部学術活動報告を含め、充実した内容を盛り込んでいきたい。
	剖検情報委員会	宇於崎 宏	個人情報保護に対応しながら、剖検情報の収集、剖検報発刊を行う。また蓄積された情報の検索サービスを提供する。厚労省のICD11国内適用に対応できる様に準備を進める。
	癌取り扱い規約委員会	都築 豊徳	委員全体から若手を中心に採用し、新しい視点から癌取り扱い規約のあり方を見直す。他領域への意見を聞き取るもしくは意見が言える状況を創出する。日本病理学会からの病理医のICCRへの参加を積極的に推進し、国際的視野に立った癌取り扱い規約が作成できる素地を作る。
	小児腫瘍組織分類小委員会	井上 健	代表的な希少がんである小児腫瘍の病理診断に関して、「希少がん診断のための病理育成事業」とも協働しながら、新たな知見の普及に対応すべく活動を継続する。特に小児腫瘍のWHO分類については既にβ版がオンラインで公開されており、2022年度中には冊子体が刊行される予定であるが、その内容に関して、必要な知識の普及をはかりたい。
	日本病理学会領域横断的がん取り扱い規約検討WG	渡邊 麗子	昨年度から継続している、領域横断的がん取り扱い規約第2版、の出版準備作業を進める。あわせて、日本癌治療学会や他の団体・機構との連携や情報収集に努めながら、病理診断に関与する臓器横断的に取り扱う事項(リンパ節名称など)の問題提起や整備への方向性を示していきたい。
金井	病理診療ガイドライン作成委員会	金井 弥栄	領域横断的がん取り扱い規約・AIガイドライン・ゲノム診療用病理組織検体取り扱い規程等、日本病理学会が作成する各種診療等のガイドラインの適正な作成を行うための、基盤整備を行う。極力フォーマットを統一し、重複を最小限にし、現場の実用に資するガイドラインとなるよう、利便性の向上を目指す。
	AIガイドライン策定WG	白石 泰三	令和4年度中に「病理AIの手引き」を完成し、次ぎに利用者のための病理AIガイドライン(仮題)を完成する。
	ゲノム診療用病理組織検体取り扱い規程策定WG	畑中 豊	2018年3月の初版発出から4年が経過したため、新規実証データやRWD等に基づき診療用規程の改訂を行う。
都築	用語委員会	鳥越 俊彦	第2期目になります。本委員会の意義と使命を自覚し、誠実・確実・迅速に任務を果たしたいと思います。委員の皆様にはできる限り省エネモードで任務を果たしていただけるよう努力したいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。
	研究推進委員会	鳥越 俊彦	近年、ゲノム医療、分子病理学、人工知能、免疫病理学など、新しい領域の病理学を積極的に取り入れる事が基礎だけでなく、診断病理においても求められるようになってきた。本委員会では、病理学会会員にこれら最新情報を伝達し、若手病理医の研究マインドを喚起すべく、尽力したいと思います。特に、これまで好評を博してきた病理学会カンファレンスを益々発展させ、活動してまいります。どうぞご支援のほど、お願い申し上げます。
豊國	研究委員会	豊國 伸哉	研究委員会が掌握する研究に関して適切な運営が行われているかどうかを管理する。個人情報や匿名加工情報の取り扱いを適切に実施したい。
	JP-AID DB推進事業WG	倉田 盛人	およそ9.6万枚の病理デジタル画像(Pathology-Whole Slide Imaging: P-WSI)を収録した病理画像データベースを病理学会会員が無料で利用出来るように整備する。また、データベース維持のための費用が捻出できるようなシステムづくりを構築する。
佐々木	希少がん病理診断支援検討委員会 (※希少がん診断のための病理医育成事業)	佐々木 毅	これまでの希少がん6分野(骨軟部腫瘍・脳腫瘍・小児腫瘍・頭頸部腫瘍・リンパ腫・皮膚腫瘍)に、乳腺、婦人科領域の稀な組織型(希少サブタイプ)を加えて、希少がん病理診断講習会をWEBで年に4回、Eラーニング問題を充実して希少がん診断のための病理医の育成を行う。また若手の希少がん領域へのリクルート、エキスパート、コンサルタント育成を目的としたエキスパート育成講習会も開催する予定である。なお、Eラーニングに関しては問題数が増え、ボリュームが増大していることから、システム改修を予定しており、すでにその分の国庫補助金を獲得し、4月よりシステム改修に入る予定である。
金井	ゲノム研究用病理組織検体取り扱い規程策定委員会	金井 弥栄	病理組織検体をゲノム等オミックス研究に資する品質を保持して収集・保管することで、日本病理学会員が次世代のゲノム医療を創出する研究に貢献できるよう、病理組織検体取り扱い手順を標準化する。新規に普及したオミックス解析手技に対応するように、現行の規程を実証解析に基づいて改訂し、研究基盤整備における病理学の意義を日本病理学会外にも発信できるようにする。
森井	病理専門医制度運営委員会	森井 英一	病理専門医研修プログラム、専門医認定試験、資格更新の恒常的な運営と改善を図り、質の担保された専門医制度を実現する。
	病理専門医資格審査委員会/更新委員会	村田 哲也	昨年度実施した書類審査前のweb講習会は成果があり、以前に比べ審査で問題となる事例が減りました。次年度以降も引き続き開催し、審査当日の手間を軽減するようにします。
	病理専門医試験委員会	柴原 純二	昨年度初めて導入されたWSIを用いた専門医試験は、概ね問題なく実施されたが、WSIの画質やPCの動作などの点で幾つかの課題が指摘された。問題の解決を図り、受験生に不利益のないよう試験を実施したい。
	病理専門医試験実施委員会	非公開	
	病理専門医施設審査委員会	坂谷 貴司	これまで施設認定については、認定施設A、B、S、登録施設、研修協力施設の区分で行なってきたが、病理専門医制度運営委員会での検討による「日本病理学会認定教育施設A」と「日本病理学会認定教育施設B」とする新区分で施設認定を行う予定である。学会による認定施設と専門研修プログラムにおける基幹・連携施設の位置づけについてわかりやすく周知したい。
	病理専門医研修プログラム審査委員会	大橋 健一	2022年度は大改訂の年に当たるが、機構が示す手続きの変更について各プログラム責任者に伝え、スムーズに審査が進める。全国的な剖検数の低下に対しても、できるだけ病理専攻医の定員が下がらず、志望者の減少が起きないように対応する。

常任理事 会担当者	委員会名	(兼任指定職)	令和4/5年度 課題と抱負 (50-200文字程度を目安にご記入ください)
		委員長	
佐々木	分子病理専門医制度運営委員会	佐々木 毅 (医療業務)	分子病理専門医認定制度が3年目を迎えるにあたり、認定とともに、認定取得後の分子病理専門医の教育や更新要件についての検討が重要課題となっている。分子病理関係の各委員会とも連携し、また病理専門医制度運営委員会とも連携して、本制度の充実と学会編への周知・教育を推し進める。
	分子病理専門医研修委員会	増田しのぶ	本委員会では、分子病理専門医認定のための研修カリキュラムの策定、編集ならびに材指定などについて検討する。
	分子病理専門医資格審査委員会	畑中佳奈子	「分子病理専門医試験要項」と、「資格更新要件」の確認を行い、12月に行われる分子病理専門医試験の審査を、その年の10月初旬より開始し10月中旬をめどに完了する。分子病理専門医認定者資格更新審査では、エキスパートパネル レポートを含む審査が開始となり、適正な審査方法を確立する。また令和4年度以降に開催する分子病理専門医更新講習会等に関しても具体的な内容等に関して、研修委員会などと連携する。
	分子病理専門医試験委員会	西原 広史	
	分子病理専門医試験実施委員会	非公開	
森井	口腔病理専門医制度運営委員会	清島 保	より社会のニーズに合うよう、「口腔病理学の発展ならびに口腔病理診断業務の普遍的な提供」についての検討を継続する。本年度より、口腔病理専門医資格更新改訂の移行期間に入る。また、分子病理専門医(口腔)も認定され、新たな対応が求められる。専門的知識・経験に基づいた社会貢献や自らの知識・技能の向上に関し、関連する委員会の助言・協力の上、口腔病理医が自己研鑽を続けて社会へ還元できるように教育等の環境整備に努める。
	口腔病理専門医試験委員会	入江 太郎	①人再現性・異時再現性の高い病理診断が得られる良質な標本を用いること、②口腔病理専門医として現場で遭遇する頻度が高い症例を用いること、③subspecialityとして相談を受けることが実際にある様な症例を用いること、これらを踏まえた適切な症例・標本選択による試験が実施される様図りたい。
	口腔病理専門医試験実施委員会	非公開	
	口腔病理専門医資格審査委員会	美島 健二	口腔病理専門医試験の資格審査については、試験申請要綱に則って適切かつ的確な運用を行いたいと考えております。また、本年度は新基準に則った資格更新の初年度にあたります。つきましては、新旧移行期間に適用される基準にしたがって、更新者に不利益の生じないよう厳密な運用を行いたいと考えます。
	口腔病理専門医制度基盤整備WG	森 泰昌	口腔病理専門医資格更新の改訂ならびに、分子病理専門医(口腔)が承認された。これを受け、口腔病理学の発展ならびに口腔病理診断業務の普遍的な提供を目的とし、口腔病理専門医の継続的な輩出と社会的貢献のため、研修システムの在りかたについて引き続き検討する。加えて関連する機関との連携等についてのWG案を作成し、口腔病理専門医制度運営委員会へ提出する。
佐々木	医療業務委員会	佐々木 毅	タスク・シフト/シェアにかかる問題では、日本臨床衛生検査技師会とも連携を取り、病理医・病理技師間で齟齬がないように現場への周知を図りたい。また、C-2技術医療機関に関しては、厚労省との交渉等を推し進めていけるようなデータ等の収集に関して委員会として対応したい。コロナウイルス感染症に関しては、病理解剖を含めた検体量の回復や感染対策について、委員会として取り上げ、HPなどから会員への周知を図る。
	コンサルテーション委員会	久岡 正典	令和3年度までに策定された運用手順・方針に基づき、コンサルテーションシステムを円滑に運営していきたい。脳腫瘍・骨軟部腫瘍以外への有料化領域拡大の可能性や、外部のコンサルテーションシステムとの連携・統合の可能性と共に、遺伝子解析を伴う希少がん診断のコンサルテーションの方向性を示すことが課題であり、他の関係委員会とも連携しながら検討していく。
	(がん研究センターとの)コンサルテーション合同WG	久岡 正典	コンサルテーション委員会からの諮問を受け、外部(特に国立がん研究センター)のコンサルテーションシステムとの連携・統合や、病理診断と連動した遺伝子解析の運用に関わる諸問題を整理の上、それらの解決方法を模索していきたい。
	社会保険委員会	佐々木 毅	2022年診療報酬改定では、病理診断料が450点から520点に増額、病理判断料が150点から130点に減額という対応がなされたが、病理学会からの要望は結果的にはほとんど通らなかった。2024年診療報酬改定に向けて、2022年12月には案を内保連に提出する必要がある、それまでに会員からの意見にも耳を傾け、要望項目案をまとめたい。なお、世代交代を目的に社会保険委員会委員を対象としてWEBでの診療報酬に関するレクチャーを行う予定としている。
	精度管理委員会	羽場 礼次	精度管理委員会は、NPO法人日本病理精度保証機構や日本臨床衛生検査技師会など他学会と連携し、病理診断の補助診断である免疫組織化学の精度管理を中心に情報収集や問題点を抽出し、その解決策を検討してきた。特に、NPO法人日本病理精度保証機構には、外部精度保証システムの評価者や教育研修会の運営協力をやってきた。今後は免疫組織化学だけでなく、コンパニオン診断の精度向上や遺伝子パネル検査などのゲノム医療に対応した核酸品質の保証、日常業務である病理組織診断の保証に関しても検討し、その精度保証をNPO法人日本病理精度保証機構や他学会とも協力を行いながら実践していきたい。
	剖検・病理技術委員会	柴原 純二	剖検率の低下や若手病理医の経験不足など剖検に関わる課題が山積している。問題点を整理し、具体的な対応策を講じたい。
金井	ゲノム病理診断検討委員会	金井 弥栄	国際標準化機構ISOにおける外科病理診断のガイダンス文書策定に対し、日本病理学会から意見を発信する。我が国における病理診断と臨床検査の関係を把握し、時勢に応じて適切な対応を取る。ゲノム医療の実装に伴い、病理診断学が、ゲノム情報を取り込んで変革を遂げるべき方向性について議論を深める。
佐々木	診療関連死調査に関する委員会	羽賀 博典	診療関連死調査に関する情報を各支部代表の委員の先生方と共有し、各支部を通して会員の皆様に情報を提供したい。一般社団法人 日本医療安全調査機構の医療事故調査・支援センターの協力学会として調査が円滑に進むように協力する。
	AI・デジパソ・医療情報委員会	吉澤 明彦	デジタルパソロジーに関して以下の課題に取り組む。また人工知能(AI)の病理診断分野での応用を見据え、AIガイドライン策定WGと連携し課題解決に取り組む。 課題:1)「個人情報を加味したWSIの運用の提言」の発行、2)「デジタル病理画像を用いた病理診断のための手引き(2016年)」および「病理診断のためのデジタルパソロジーシステム技術基準(日本デジタルパソロジー研究会、2016年)」の改訂

常任理事 会担当者	委員会名	(兼任指定職)	令和4/5年度 課題と抱負 (50-200文字程度を目安にご記入ください)
		委員長	
田中	広報委員会	笹島ゆう子	(1)社会への情報発信:学会として発信すべきことを協議し、関連する委員会と連携してHPやSNS、広報動画などを用いた情報発信を積極的に進める。 (2)学会HPのブラッシュアップ:スマートフォンに対応したバージョンへのシステム更新や英語ページの作成を進める。 (3)単位の電子化:すでに動いている希少がんe-learningを足がかりとして、総会・各支部の単位を各会員が個人管理できるようなシステムを構築する。まずは病理専攻医手帳の電子化から進める。 (4)会員システムの管理:SSOシステム導入により、Pathology Internationalの閲覧に一部不具合が生じており解消に向けて対策中である。
	社会への情報発信委員会	伊藤 智雄	市民、学生、初期研修医向けの様々な情報発信を強化する。具体的にはCOVID-19蔓延状況に配慮しつつ、病理診断に関する動画の作製を完成する。 HANSHIN健康メッセの出展を継続し、会員へのより強力なPRを行う。各種パンフレットを作成する。新たな情報発信の手段とコンテンツについて検討し、実現に向けて提案・努力する。
	病理情報ネットワーク管理運営委員会	宇於崎 宏	病理情報ネットワークセンターを安定的に運用する。またその周知、活用を図っていく。生涯教育委員会や希少がんでの取り組みにも連携して、シナジー効果を上げるよう努力する。
金井	教育委員会	金井 弥栄	治療指針を豊富に提供しうる病理診断学と、広汎な研究領域にプラットフォームを提供する基礎医学としての病理学の真価を、学部学生に浸透させるための卒前教育のあり方について、継続的に議論する。特にポストコロナの教育体制に関して、適宜アンケートを行いまたシンポジウムを開催するなどして、人材育成につながる情報発信に努める。
豊國	病理医・研究医の育成とリクルート委員会	豊國 伸哉	2年ぶりとなるレジナビFairへの参加し、大学院生対象の新人賞を広く宣伝し選考することにより、病理医・研究医のリクルートと育成を図る。
金井	病理診断講習会委員会	坂谷 貴司	2023,2024年の総会時に行う病理診断講習会における講習会内容の策定およびハンドアウト作成を行う。臓器別診断講習会における呈示症例のWSI、症例解説など学会HPに掲載することで生涯教育コンテンツ化を進めており、今後さらなる充実を図りたい。
	海外研修委員会	黒瀬 顕	emmelweis大学(ハンガリー)との提携による病理解剖研修コースは5回を終え会員に膾炙してきたが、コロナ禍により2020年度から中断せざるを得ない状況である。本研修コースは5日間で9体の病理解剖とレポート作成という濃密な日程だが、剖検例は症例の偏りなく選択され熱意ある卓越した指導陣の教育を受ける。研修後のアンケートでは参加者の高い達成感が毎回得られている。また忙しい研修の合間に設定されているcultural programを通じハンガリーの文化に接することも出来る。本国では伝統的に剖検が重視され病院死亡例は基本的に剖検が課せられるため剖検手技や剖検報告の作成が系統立っており、病理は医療の最終検証的役割を担う点が特徴である。本研修は単に剖検体数の獲得ではなく、かかる剖検が重視される国において実際に剖検を行って病理医の役割を体験しそれをキャリアに生かすことが目的であり、このような貴重な機会を病理学会が提供している意義を発信し続けたい。現時点では未だ研修再開の目処は立っていないが、感染状況の改善が見込まれる際には従来の夏期開催にこだわらずに研修再開を企画立案したいと考えている。
	生涯教育委員会	相島 慎一	生涯教育委員会では、病理学会会員が生涯にわたり病理学に関する知識を広げ、技能を磨き研鑽を積むための継続的な学習制度を確立する。これまで構築してきた生涯教育 e-learning、病理診断講習会および剖検講習会の標本提示、専門医資格更新や分子病理専門医講習に関する案内などを中心に、病理診断能力の質を担保するような生涯教育サイトを構築していく予定である。新たに、最新の技術革新や診断ツールに関する情報の整理、自己学習に役立ち学習意欲が高まる情報を会員に発信、アピールすることが課題である。
	診断病理サマーフェスト委員会	鬼島 宏	病理診断サマーフェストは単なる病理診断の講習会ではなく、臨床医と病理医との対話を通じて新しい病理診断の構築を目指すことを主な目的としています。系統的な疾患について、病理医と臨床医が合同でその疾患の診断・治療における最新の知見を扱うのが本会独自の試みです。毎回多数の参加者がある病理診断サマーフェストですが、今後扱うテーマ、健全な運営、新型コロナウイルス感染拡大に伴うあり方についてもしっかりと検討してゆきます。
	ゲノム病理標準化講習会委員会	金井 弥栄	ゲノム研究用病理組織検体取扱い規程の内容、組織バンキングの実際、ゲノム研究の具体的な成果について解説する「ゲノム病理標準化講習会」を開催することで、分子病理専門医が研究基盤整備に貢献することの意義を広く知っていただく。ゲノム研究における病理学(病理医)の役割を周知するべく、日本病理学会外への発信にも努める。